小説 羽沢向一

挿絵 亀　　井

立ち読み版

登場人物紹介

Characters

鐘ヶ谷流華（かねがやつるか）

名門鐘ヶ谷家の現当主であり、優秀な霊能者。とくに鐘ヶ谷家伝統の性欲を利用した術を得意とする。

静奈（しずな）

流華の秘書を務める美女。つねに流華とともにあり、彼女の命令で良吾を陵辱する。

護堂瀬良（ごどうせら）

退魔結社ノーブル・ヒューマニズム・ソサエティ＝ＮＨＳの幹部。優秀な科学技術者。

白坂友紀子（しらさかゆきこ）

紀崎町に住んでいる、少女の幽霊。

結枝（ゆえ）

流華の家に大勢いるメイドの一人で、流華の一番のお気に入り。良吾が鐘ヶ谷家に引き取られてからは、彼の世話役を任される。

深見良吾（ふかみりょうご）

小柄な美少年。幼いころに事故で両親を失い、伯父の家に引き取られ育てられる。

プロローグ　007
第一章　おまえのアレが欲しくてたまらない　028
第二章　あなたがはじめてなんです　076
第三章　きみのすべてを奪ってあげる　140
第四章　そなたの肉体を捧げるがよい　197
エピローグ　233

静奈と結枝が唇と舌の交合をやめて、良吾の露出した肉体をじっと見つめてきた。流華も近寄ってきて、またなんでも貫通するような視線を浴びせてくる。

もともとスポーツにあまり興味がなく、読書が好きな良吾の身体は、とてもたくましいものとはいえなかった。少女じみた顔つきにふさわしく、十六歳の少年にしては華奢で、色白だ。ある種の美しさすら感じられる体型をしている。

だが三人の年上の美女の六本の視線は、一箇所に集中していた。良吾自身の意思に反して左右に広がった脚の間にそそり立つものが、輝く瞳の砲火を受けている。異性を意識するようになってからはじめて大人の女性にペニスを見られてしまい、良吾は顔を真っ赤にした。声も出せず、壊れた人形のように口がパクパクと動く。

（恥ずかしいっ！）

良吾は胸のうちで悲鳴をあげていた。衣服が破裂した理由など、考えることもできない。とにかく部屋の中で、自分だけが裸でいるという状況に、羞恥心を煽り立てられる。三人の顔が見られなくてうつむくと、自分の分身がいきり立っているのが目に入った。

（どうして、こんなときに勃ってるんだ。恥ずかしすぎるよっ！）

良吾の意思に反するモノを手で隠したくても、両手は身体の脇に垂れているだけで、まったく反応しない。足も動かせない。床に座りこんで、股間を開陳しつづけるしかない。生まれてはじめての羞恥に悩乱する良吾に、美女たちの声が浴びせられた。

静奈の眼鏡が冷たい光を放ち、言葉もまた冷ややかだった。
「まあ、キスを見たくらいで、勃起させているなんて、なんてはしたないペニスですの」
結枝は小さな愛玩動物を見つけたように、幸せそうな顔を溶かしている。
「勃ってるのに、全然皮が剥けてなくて、亀頭が隠れちゃってる。かわいい～」
流華の表情には、あいかわらずの威圧感が漂う。
「大きさはまあまあ。良吾の年齢と体格なら、これでいいだろう」
口々に論評された通りだった。良吾のペニスは強烈なキスを見せつけられて、硬直してしまった。勃起した状態でも、亀頭は先端がほんのわずかに覗かせるだけの包茎だ。これがもっと立派で雄渾な男の武器なら、見られても平気かもしれない、などと良吾は考えられなかった。どんなペニスでも、ただひたすら恥ずかしいのみだ。
ましてや、わざとセクシーなキスを見せつけて勃起させ、しかも裸に剥いて露出させたのは、女たちのほうだ、などと言い返すことなど、とてもできなかった。流華をはじめとする美女たちの迫力に気圧されている。
本来事態の責任を負うはずの静奈が、いよいよ冷ややかな視線を包茎に向けた。
「女に見られてペニスを硬くさせるなんて、恥ずかしくないのかしら」
「そんなことを言われても……」
秘書の目つきは氷のように冷たいのに、良吾は皮に包まれた亀頭が熱せられるのを感じ

た。恥ずかしくてたまらないのに、冷たい視線を浴びせられるほど勃起がきつくなり、先端がヒクヒクと動いてしまう。

「やれやれ。こうなったら、深見良吾がどこまで恥知らずに硬くなるのか、調べてみなくてはなりませんわね」

良吾の顔の前を、静奈の両手が横ぎった。少年のすぐ目の前で、細い指が蜘蛛の脚のように素早く動いて、メイドの胸のリボンをほどいていく。結枝の制服の胸はボタンではなくリボンで結んであるので、自然と前が広がってしまう。

（うわ、み、見えた！）

はだけた濃紺の制服の下から、純白のブラジャーに包まれた二個の球体が出現する。

（大きい！　大きいよ！）

良吾は恥ずかしくて声には出せなかったが、胸の中で何度も同じ感嘆の言葉をくりかえした。

結枝が着けているブラジャーは、フリルをたっぷりと使ったかわいいデザインだ。カップの面積も充分に大きい。それでも結枝のふくよかな乳房は、カップからはみ出て、肌色の深い谷間を形成している。

そもそも良吾は、女の下着姿を生で見るのもはじめてだ。男なら憧れ、夢見ないではいられない、永遠の神秘の物体ブラジャーが、目の前に存在しているのだ。手を動かせれば

すぐに届くところに、白い布の内部に収まった豊満な乳房が息づいているのだ。
見つめているだけで、体内の血液が音を立てて股間の肉の棒に集中する。勃起の角度がさらに大きくなり、亀頭の振幅が激しくなる。
良吾の肉体の変化を、流華がにやついてながめた。笑いを含んだ声が、秘書に命令を下す。
「静奈も自慢のものを、良吾に見せてやれ」
「はい、流華様」
平静に答えて、静奈が自分の指で黒いスーツのボタンをはずした。良吾の目は自然とそちらへ移動する。
もし少年の理性がまともに働いていたなら、静奈がスーツの下に着ていたはずのインナーがなくなっていることに気づいたはずだ。伯父の家で会ったときからいまに至るまで、一度もインナーを脱ぐ時間など存在しなかったのに。
だが、良吾の意識は、新たなブラジャーが見られるという、胸も亀頭もはちきれるばかりの期待しかない。スーツがはだけた途端、良吾の中で驚愕が爆発した。今度はつい声に出してしまう。
「大きいっ！」
スーツの上からの想像を凌駕する、秘書のバストのサイズだった。怜悧な顔と同じく、

日焼けとは無縁の白い肌に、黒いレースのハーフカップのブラジャーが鮮烈に映えている。なによりも白い乳房の強烈な存在感！　いまにもブラジャーをはじき飛ばしそうに、雄大な乳球が前に張り出している。確実に三人の美女の中で、いやおそらくこの屋敷にいるすべての女の中で、最大の巨乳だ。

目の前に、サイズの差はあるが、いずれ劣らぬ豊かで美しい胸をさらけだされて、良吾の頭が沸騰してしまう。

「さあ、結枝」

「はい、静奈様」

静奈の両手が、メイドの白いブラジャーにあてがわれた。

結枝の十本の指が、秘書の黒いブラジャーと乳房をつかんだ。

同時に、静奈の薄めの唇が開き、結枝のぽってりした唇が震えた。

「うっんん」

「あっはあん」

そろってピクンと首をそらし、天井を向いた口から甘い吐息があふれる。何度も熱い息を洩らしてから、再び秘書とメイドの濡れた瞳が見つめあった。

「いいわ、結枝、そのまま」

「気持ちいい、静奈様、もっと」

互いの言葉に反応して、下着の上から四つの乳房が揉みこまれる。まだ女の身体に触れたことのない良吾の目の前で、白と黒の愛らしい布に包まれた乳肉が、指の動きに合わせて縦横無尽に形を変えている。

「はああ、いいっ！」

「ああん、すてき！」

胸を揉みながら、揉まれながら、二人の美女はまた身体を近づけた。相手の胸から手が離れると、薄い布に包まれた四つの乳房が接触し、密着し、互いの形を押しつぶした。凝視する良吾へ向かって、あふれた乳肉が迫ってくる。

胸の上では、再び唇同士が重なりあっていた。二つの口が触れては離れ、また吸いあっては別れる。その間にも二枚の舌がこれ見よがしに相手をまさぐりあい、絡みあい、ねっとりと湿った音を奏でた。

「うんっ、はあああ……」

「んふう、あんんん……」

押しあう乳房が感じるのか、静奈の両腕が震え、肩が上下した。結枝の喉がひくつき、背筋がわななく。

ディープキスをくりかえしながら、静奈の両手がメイドのスカートの裾をつかんだ。濃紺のスカートがまくり上げられ、膝立ちになった太腿があらわになる。さらにその奥から、

白いフリルが覗いた。
「わあっ！」
わけもわからず、良吾は歓声をほとばしらせた。またも胸のうちで何度も叫んでいる。
（見えた！　パンティが見えた！　ああっ、あっちも見える！）
メイドの両手が動き、秘書の黒いスカートがめくられる。こちらはメイドよりも高く、腰の位置まで裾が上げられ、雪のように白いむっちりした太腿が現れる。そのつけ根には、薄いレースの黒い三角形がぺったりと貼りついている。いまにも透けそうなデザインのビキニパンティなのに、良吾がどれだけ目を凝らしても奥にあるモノは見えなかった。
突如として左右に出現した白と黒の生パンティに、良吾は二つの餌を同時に出された犬のように首を動かしつづけた。少年の視界の中に、二本の手が入ってきた。良吾の正面に流華が膝をつき、左手を自分の秘書の下腹部に、右手を自分のメイドの股間に当てる。黒と白のクロッチ部分に指先を押しつけ、小刻みに震わせた。
「ひいいっ！」
「はああっ！」
指先から電流が流れたかのように、静奈と結枝の身体がガクガクと震えた。握っていたスカートを離し、ほとんど無意識に両腕を互いの背中にまわして、きつく抱き合う。それでも身体の震えはやまず、つぶれてはみ出た乳肉が、良吾の顔のすぐ前でふるふると揺れ

ている。
「あひいいっ、る、流華様、それ以上はっ、いいいいいっ！」
「ああっあんん、流華様、きつすぎますう、ふわあああ！」
これもまた『術』なのだろうか。鐘ヶ谷家の血が共鳴しているのか、良吾は直観的に、流華の指先からなにかの力かエネルギーのようなものが放出されているのを感じ取っていた。
（指先からのものが、静奈さんと結枝さんを感じさせてるんだ。ああ。あんなに気持ちよさそうになってる！）
いかに経験のない童貞の十六歳といえども、本能が教えてくれる。秘書とメイドが強い快感に身悶えているのだと。
「いいっ、気持ちいいです、流華様！」
「もう、がまんできません、結枝を早くイカせてくださいませ！」
「いいだろう。結枝の蜜を、良吾にたっぷりとやってくれ」
流華の両手が、秘書とメイドの股間から離れた。解放されたパンティは内側からにじんだ体液で濡れて、秘部にぴったりと貼りついている。二人とも、恥丘のふっくらしたふくらみも、中央部に刻まれた縦の筋も、くっきりと浮かび上がっていた。
「うっんっ」

「はあああ」
流華から流しこまれた淫らなエネルギーは、まだ敏感な部分に残っているのが、良吾にもわかった。まるでパンティの中にバイブでも入っているように、静奈も結枝も喘ぎながら、腰を振りつづけている。愛撫されてもいないのに美女が悶える姿は、奇妙に倒錯的で、良吾の全身を興奮の炎でより熱くさせた。
よがりつづける二人をながめながら、流華はダークブラウンのシャツのボタンをはずし始めた。シャツの胸もとが大きく開き、静奈よりは小さいが結枝には負けない深さの胸の谷間が覗いた。良吾はまた胸の中で驚きの歓声を発した。
（あっ、ブラジャーを着けてない！）
シャツの下は素肌だった。もう少しで乳首が見えるという位置で、シャツが止まっているのが、かえって煽情的だ。
流華の手の動きは、まだ止まらなかった。腰のベルトを手早くはずして、シャツと同じ色のパンツを、皮を剥くように下ろした。現れたのは、色は静奈と同じ黒だが、競泳用の水着を思わせるぴっちりしたビキニパンツだ。
シャツに小さなパンティという流華の容姿は、セクシーであると同時に、顔つきに似合った迫力がある。同じ豊乳を持ちながら、静奈たちとは異なる、引きしまった美しさに輝いた。良吾もペニスを振り立てながらも、なにか畏怖に近い感銘を受けた。

しかし主人の威厳など関係ないとばかりに、メイドが白いパンティを円を描くようにくねらせて、甘えた媚声を投げかける。
「ああ、流華様、早く、早くううん」
「覚悟しろよ」
流華はメイドの背後にひざまずき、はだけた胸を濃紺の制服の背中にくっつけた。両手を結枝の前面にまわし、ブラジャーに包まれた右の乳房をつかんだ。結枝の背筋がのけぞり、ブラジャーに支えられた柔らかい豊乳が上下に揺れる。
「ううっんん、いいっ！」
「もっとよくしてやる」
メイドの耳もとで、流華が舐めるように告げる。その力強い声は良吾に聞かせているようでもあった。結枝の左の脇腹から、主人の左手が伸びて、スカートの内側へと潜りこむ。五本の指がパンティの底部に吸いついた。女主人の両手からまた力が放出されるのを、良吾はより鮮明に感じ取った。
（まただ。また、流華さんの指から力が出てる！）
力が、メイドの胸と股間を包みこむ。良吾が見つめる前で、乳房が上下左右に振れ、腰が前後に小刻みに動いた。頭のキャップやエプロンやブラジャーやパンティなど全身の白いフリルが、風に揺れる花畑のようにひらひらとなびく。ふっくらした顔が予想以上の歓

喜に溶け崩れた。

「ひいいっ！　すっ、すごいですっ！」

不思議な愛撫でメイドをよがらせる女主人の顔にも、獲物を追いつめるハンターに似た悦びの色が浮かんでいる。それまで良吾に見せていた厳しさと優しさが入り混じった顔つきとは異なる、流華ならではの官能の表情だ。よがりまくっている結枝の蕩けた顔よりも、流華の他人を追いつめる顔つきのほうが、良吾にはよりセクシーに感じられて、また勃起亀頭がビクビクとのたうった。

良吾の敏感な反応を、静奈が冷ややかな横目で見つめて笑った。

「まあ、結枝、今日はいつもより気持ちよさそうね。この新入りの子供に見られるのが、そんなにいいのかしら」

体温の低そうな秘書の両手が、メイドの腹をなでる。口調とは裏腹に愛情があふれた手の動きだ。静奈の愛撫も加わり、結枝の悦びもより深くなる。ひとりのかわいい少女が二人の艶めかしい美女に責められる姿は、良吾がこれまでに妄想したすべてのエッチなシーンをも超えていた。

（すごい。なんて、いやらしい光景なんだろう！）

「良吾の前だから、今日は出血大サービスだ。一気にいくぞ。そらっ！」

「ひっいいいいっ！　いきなり、そんなにいっ！」

あきらかに結枝の胸がひとまわり張りを増した。ブラジャーが乳房に食い入り、はみ出た柔肉がむっちりと盛り上がりを高くする。それまでわからなかった乳首のシルエットが、ブラジャーの表面に立ち上がった。パンティから伸びる太腿もむちむちと肉がみなぎり、しっとりと汗に濡れて、良吾を誘うようにわなないている。

「あああ、すごいわ、結枝。それほど感じているなんて」

メイドが全身から発する喜悦の波に当てられて、静奈も白い顔を上気させる。黒いレースのハーフカップが引きちぎれそうなほど、巨乳が盛り上がり、震えている。

結枝が頭のキャップが飛んでいきそうな勢いで、顔を振りたくった。二本の三つ編みもはたはたと動きまわる。

「イクっ、イクイクうううううっ!!」

左手を押しつけられたままの股間が、カクンと前へ、良吾へ向かって突き出される。

パンティの布を突き抜けて、白い液体が壊れた水道の蛇口のように噴き上がった。結枝の愛液は空中に白い弧を描き、良吾のペニスを直撃した。

「うわあああっ!」

良吾はその熱さに叫んでいた。メイドの蜜液が熱いのではなく、淫汁を浴びせられたペニスが内側から凄まじい熱を発したのだ。

「あああああ、おちんちんが! ぼくのおちんちんがビキビキ言ってる! 壊れる!

壊れちゃう！」

誰もペニスに触れていないのに、精巣からかつてないほどの大量の精液が放出され、輸精管を破りそうな勢いで勃起へ殺到してくる。快楽を感じる間もなく、射精がはじまろうとする。

「あおおおお、出る！　射精するうっ！」

「よかろう。良吾に、鐘ヶ谷家の男の証をつけてやるぞ」

流華は胸の前で両手を向かい合わせた。見えないボールを左右からつかんでいるように、十本の指を開いている。

離れた掌の間に、一枚の紙が浮かんでいた。長方形の短冊で、表面には敷物と同じ赤い図形が並んでいる。神社で売っている魔除けのお札にも見えた。やっていることは紙幣を浮かせる手品のようだが、とても遊んでいる雰囲気などない。流華の表情は真剣そのものだ。良吾には意味のわからない言葉を凄まじい早口で唱えている。

「深見良吾、受け取れ。精封の護符を！」

両手の間からお札が飛び出し、良吾の股間へ向けてまっしぐらに迫ってきた。内腿の間で、お札がひとりでに細くよじれて、白と赤のこよりになり、射精寸前の勃起の根もとに巻きついた。自分の股間で起きた奇怪な事態にも気づかず、良吾は人前で射精する羞恥の言葉を発した。

第三章　きみのすべてを奪ってあげる

少年の乳首を責めているのは、全身に巻きついたおさげの先端だった。緑の髪の毛の束が刷毛のように動き、二つの乳首に絶妙な乳悦をもたらしている。夜毎に流華の指先から出る淫気を浴びせられた良吾の乳首は、いまやペニスに次ぐ性感帯へと調教されていた。

無意識に顔を左右に振り、男とは思えないかわいらしい声をあげる少年の恥態を、女技術者たちが見つめる。いままで熱心にモニターの映像を睨み、計器の様々な数値を読み取っていた冷静な瞳が、良吾の快感に引きつる表情と、色づいた華奢な裸体を注視している。いつもは理性的な瞳が、情熱的な色に輝き、少年が感じている快楽に共感していた。

「見て、あのかわいい顔。すごく、いやらしい」

「男のくせに、乳首だけでこんなによがるなんて、異常だわ」

「きっと妖怪たちに、変態になるように仕込まれたのよ」

「わたしも、あんな男の子を奴隷に調教してみたいわ」

白衣の美女たちが口々にかけてくる言葉が、良吾の耳に洪水となって流れこんでくる。変態の奴隷と呼ばれて、いよいよみじめな羞恥に全身が火と燃えた。

（いやだ。こんなに大勢の女の人の前で、男のくせに乳首で気持ちよくなってしまうなんて）

良吾が恥じらい、顔を赤くするほど、女たちがいっせいに歓声をあげて、ますます少年の裸体を見つめる視線の温度を上昇させた。

「良吾さん、いままで教えていなかった悦びを、今日は教えてあげますわ」
静奈が再び良吾の後ろにまわり、膝をついた。両手で小さな尻たぶをつかみ、谷間を左右に割り開く。
「な、なに⁉　静奈さん、そんなところは、見ないでください！」
得体のしれない恐怖に襲われて、良吾は尻を振って逃れようとした。しかし、それも観客の女たちには、少年が自分たちを誘っているようにしか見えない。
「まあ、あの子はきっとお尻も好きなのよ」
「本当に、とんでもない変態ね」
「ほら、あんなにお尻を振って、期待しているわ」
「早く、アナルを責めちゃいなさいよ！」
女技術者の囃す声に応えて、静奈の顔が良吾の尻の谷間に押しつけられた。日ごろメイドたちにていねいに洗われているだけあって、良吾の尻の奥もきれいなものだった。
「ダメよ、静奈。自分が楽しむ前に、瀬良の優秀な部下たちに実験対象を観察させてあげなくては」
「はい、瀬良様」
一度は谷間に沈んだ秘書の顔が、尻から離れた。おさげが動いて、良吾は上体を前に倒され、尻を突き出す姿勢にされる。静奈の手で、尻たぶをさらに広く割られる。

「あああっ、やめて！　こんな、恥ずかしい！　見せたりしないで！」
良吾の必死の懇願にもかかわらず、一方の機械の前に座る女技術者たちに向かって、良吾の肛門と睾丸が開陳された。美女たちからどっと黄色い喜声が盛り上がる。
「見て見て、この子の肛門、もうひくひくしてるわ」
「とっても感度がよさそうよ」
「変態だもの」
「毎日自分で指を入れて、オナニーして鍛えているのよ」
「自分が出した精液を飲んでるはずだわ」
あまりの言われように、唇を噛みしめて耐えていた良吾も、たまらずに叫び返した。
「ぼくは変態じゃない！　お尻の穴なんか、いじってない！」
良吾の抗いの言葉に、また歓声が沸いた。
「あはははは、かわいいわ！」
「文句言っても、おちんちんが勃っているわよ」
「もっとお尻をいやらしく振りなさい」
「エロすぎるわ、良吾くーん」
もはやどんな言葉を口にしても、女たちを喜ばせるだけだった。良吾の身体の向きが変えられ、反対側の女技術者へ肛門をさらされる。当然のごとく、また新たに恥辱をえぐり

だす言葉を雨のようにかけられた。
「はじめてなら、たっぷりと肛門を嬲られて、悶えなさいね」
「きみみたいな子なら、病みつきになるわよ」
「尻責めなしではいられなくなるといいわ！」
「早く、イクところを見せて！」
ひとしきり肛門を見世物にされると、再び良吾の尻に静奈の顔が密着してきた。牙が生えた口の中から、舌が伸びる。まさに文字通りの意味で伸びたのだ。
「ひいっ、おかしいっ！　静奈さんの舌、変ですうっ！」
良吾には見ることはできないが、尻の肌に触れる感触の異様さはわかった。人間の舌よりもはるかに長い舌、あきらかに獣の舌が、尻の谷間を上下に動いた。普段はほとんど外気に触れない肌が、何度も舐めまわされる。谷間全体が妖怪の唾液で、べっとりと濡らされてしまう。
しかも舌の表面は、肉食獣のものらしくザラザラしている。人間の平らな舌では絶対に味わえない感触が、尻の谷間から、さらにほっそりした尻たぶ全体を這いまわった。まるで尻全体を淫具で嬲られているような感覚が走り、ますます腰がくねってしまう。
「あああ、やめて、やめてください、静奈さん。正気に戻ってください」
良吾の懸命な懇願も、妖怪を支配する首輪の科学力には勝てなかった。静奈の両手でが

っちりと尻をつかまれ、固定されてしまう。唾液にまみれた尻に向かって、女秘書の抑揚のない声が吹きかけられた。
「覚悟しなさい、良吾さん」
唾液まみれの舌が、肛門に触れた。少年のすぼまった肉の蕾のしわを、とがった舌先がつつき、唾液をなすりつける。
「んあっ！　ううんっ！」
まったく未知の気持ちよさが、尻の表面から湧き出した。柔らかいしわの表面を、無数のザラザラでこすり立てられると、泥の底で気泡がはじけるような快感が次々と起こる。いままで考えもしなかった感覚を押しつけられて、良吾の脳が処理しきれなくて惑乱してしまう。
「なっ、なに⁉　これ、なんですか！　はあっ、こんなの、わからない！　全然わからないよっ！　ひあっ、ふあああっ！」
脳の神経パルスがショートしたような快感に嬲られて、おさげで拘束された全身がビクンビクンと動く。瀬良が身を乗り出して笑い声を浴びせた。
「すてきよ、きみ。電気を流された蛙の死体みたいだわ。ほらほら、おちんちんも必死に痙攣しているわよ」
「ぼくは、ぼくは、あひいいいいっ！」

良吾の肛門のすぼまりが、静奈の人外の舌で割られた。尻の奥へ、唾液に濡れた柔軟な肉の鞭が強引に潜りこんでくる。良吾は異物の侵入を阻止しようと、反射的に肛門を締めた。それはかえって舌の表面のザラザラを強く感じるだけになってしまう。敏感な神経を鑢でこすられているような感覚が、良吾の神経を灼いていく。

「ひきいっ、お尻が、ぼくのお尻が、壊されちゃう！」

そう感じたのは一瞬だった。静奈の妖怪としての魔力のなせる技なのか、生まれてはじめて異物を呑まされた肛門と腸が、深い快感に襲われた。

「はっひいいい、すごい！　すごっひいいいっ！」

ペニス全体が自分の腹にめりこむほど屹立した。肉茎の表面に血管が浮かび上がり、いまにも鮮血を噴き出しそうなほど脈打ち始める。

「出るっ！　ひいいいっ、射精するううっ！」

凄絶な快感を訴える良吾の叫び声に、瀬良も、女技術者たちも頬を紅潮させる。年上の美女たちにかこまれた中で、ただひとりで肛門を責め立てられてわめく少年の姿は、あまりに淫靡で、嗜虐心をそそる光景だ。白衣に包まれた胸の内側で、小柄な良吾の肉体への嗜虐心が、止めどなく湧いてくる。

淫らな欲望に燃える女たちの視線の中で、良吾は同じ言葉をくりかえした。

「出る！　出ちゃう！　お尻、お尻が、あああ、出るうううっ！」

汗の玉が浮かぶ腹にくっついた勃起ペニスを指差し、瀬良が興奮に上ずった言葉をぶつけた。

「おかしいわね。流華の許しがなければ、きみは射精できないのではなかったかしら。いいわよ。見ていてあげるから、精液を出せるものなら出してみなさいよ」

瀬良の音頭に合わせて、テントの中は、精液出してよ、射精してよ、と合唱になった。瀬良たちの声援に応えるように、ＮＨＳの奴隷と化した静奈が獣の舌の動きをより激しくしていく。良吾の尻の奥で、舌が形や太さを変えて、蛇のようにくねった。腸の粘膜が舌の突起の群れに嬲られると、良吾は全身を快感という太くて長い槍に貫通させられた気がして、どっと汗が噴き出した。

汗まみれの薄い胸を、瀬良の指がすうっとなでた。すくい取った汗を、瀬良の唇が吸い上げ、じっくりと少年の体液を賞味する。

「ふふふふ。おいしいわ、きみの気が狂いそうな悦びの味。わかっているわよ。男ならどうしても『出る』と叫ばずにはいられないのよね。そんなに尻を責められたら、射精しないではいられないものね。でも、きみはしたくてもできない。射精の欲求に焦らされながら、尻をもてあそばれつづけるのよ。でも、おちんちんが放置されているのもかわいそうだから、ちゃんと虐めてあげるわ。結枝、咥えてあげなさい」

「はい、瀬良様、わかりました」

それまでじっと立ちつくしていたメイドが、いきなりスイッチが入ったように動きだした。良吾の前にぽっちゃりした裸体をひざまずかせると、両手でまっすぐ上を向いている勃起をつかんだ。それだけで、良吾は新たな悦楽に打たれる。

「ひぐうっ、ふあああぁ……ぼくのおちんちんが！」

柳の精が硬くそりかえったペニスを前に傾けると、大きく口を開き、ひと息に根もとまで呑みこんだ。ふくよかな唇が、精封の護符に口づけする。

「あおおっ！　はおおおうっ！」

結枝にフェラチオされるのは、これまでに何度もある。しかし尻を貫かれ、内側からこねまわされているいまは、ペニスの性感が何倍にも高まっていた。亀頭からつけ根まで、妖怪メイドの喉の粘膜にぴっちりと包みこまれて、心臓を鷲づかみにされるような快感に襲われる。

結枝はエメラルド色の瞳から感情を消したまま、口の中で舌を絡ませて、顔を上下に動かした。唇、前歯、舌、そして喉の粘膜が、それぞれ異なる刺激で亀頭から肉茎のつけ根まで愛撫して、口技のフルコースをぶつけてくる。

前後からの猛烈な責めに挟まれて、良吾の精巣の中からは続々と精液が排出されている。輸精管を駆け上り、ペニスへと殺到する。しかし護符にふさがれた勃起は、焦燥感を募らせるばかりで、けっして解放は訪れない。自身の精液そのものが、良吾の肉体を発狂しそ

うなほどに追いつめていく。
いまや拷問道具と化した睾丸も、結枝の両手で揉みしだかれている。いかにも睾丸をあつかいなれた巧みさで、最大の快感を二個の肉の袋から引き出された。
結枝の愛撫は口と手だけに終わらない。良吾の全身に巻きついた深緑のおさげが蠢き、先端の髪の束が両方の乳首を嬲っている。
全身の性感帯を二人の妖怪に攻撃されて、なお射精を許されないのは、快楽という名の地獄に他ならなかった。
「あああ、静奈さん……結枝さん……お願いです……正気に戻って……ください」
良吾はよがり声をあげすぎてかすれた喉で、何度も二人に懇願した。だが秘書とメイドの行動にも、表情にも、なんの変化も表れない。
「……お願い……助けて……ああああ……」
「静奈、結枝、そこまでよ。良吾から離れなさい」
かぼそい少年の声を圧して、瀬良の勝ち誇った声が響いた。それまで良吾の言葉にはまったく反応しなかった二人が、さっと肛門とペニスから口を離した。華奢な裸体に巻きついていたおさげも素早くほどけて、結枝の頭の左右に戻る。
緊縛から解放された良吾は、足で立つこともできず、テントの床に転倒した。汗まみれの背中と尻を床につけて、射精できない勃起だけを高くそそり立たせている。赤く腫れあ

がった亀頭が、椅子から立った瀬良のつま先に軽くつつかれた。
「あうっ！　あああ」
ペニスへのわずかな刺激にも全身を痙攣させる良吾へ、瀬良が冷笑を浴びせる。
「きみもよくわかったわね。妖怪など信用できないことが。あいつらは人の味方ではないわ。害獣として殲滅するか、そのための道具として使役するしかないのよ」
良吾は顔をわずかに動かして、瀬良へ弱々しい瞳を向けた。
「二人が、ぼくの言葉を聞いて、くれなかったのは……すべてあなたの機械に、操られたせいです……」
「まだそんな世迷いごとを口にするなんて、驚いた子ね。いいこと」
瀬良の両手が持ち上がり、無言でたたずむ静奈と結枝を指差した。
「あいつらは、いまでこそおとなしいふりをして、人と妖怪の共存などと言っているけれど、すべてまやかしよ。あの雷獣は、流華につかまる前に十数人の人間を殺しているのよ。結枝の本体である柳の木を鐘ヶ谷屋敷に植え替えるために、もとの土地から抜いたときには、根に絡んでたくさんの人骨が出てきたわ。鐘ヶ谷家にいる他の妖怪たちも似たり寄ったりよ。嘘だと思うなら、あとで流華に聞いてみるといいわ。そんな凶悪な怪物たちを、信頼できるはずがない」
「ぼくには、よくわからない……でも、流華さんも、静奈さんも……結枝さんも、鐘ヶ谷

屋敷の人たちも、みこちゃんを幸せにしてくれた……ぼくもみこちゃんや、屋敷の子供たちの幸せを守りたい」

「ふん。妖怪は妖怪同士でいれば、それは幸せでしょうよ。でも、きみは人間よ。そうはいかないわ」

「ぼくには、みこちゃんが見えたんです……きっと、ぼくは……妖怪に近いもの、なんです……この数日で、肌で感じたものを信じたい……それに」

「それに、なんなの？」

良吾は本気で言いにくそうだった。そんな経験は一度もないが、女子からの交際の申しこみを断るような顔で告白した。

「……ぼくは、あなたを、どうしても好きにはなれません」

「ほんの数日前に鐘ヶ谷一族に入ったくせに、他の連中と同じことを言うのね。妖怪と人との共存とか口にしながら、本当は妖怪のことしか考えていない。そんなに鐘ヶ谷の血とは濃いものなの。研究価値があるかもしれないわね。でもいまは、瀬良はきみの霊力だけに用があるのよ」

瀬良が右手を、近くの女技術者へ差し出した。すぐさま部下から奇妙なものが手渡される。それは小さな白い卵を三個、テープでつなげたものだ。それぞれの卵からコードが伸びて、一個のスイッチに接続されている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

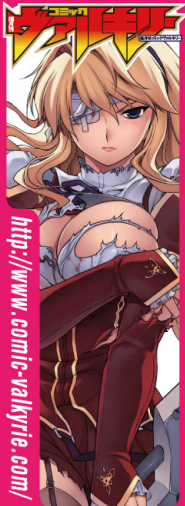
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！